

巻頭言

今年も年次報告を刊行することが出来ました。通算第3号になります。卒業生のみなさん、そして現メンバーの皆さんに感謝します。

今年の当研究室は10名のメンバーから構成されています。研究の上でも有意な進展があり、私自身の研究発表も学会等で選に選ばれました。これも、現メンバーは勿論、卒業生の皆さんのおかげでもあります。今年は修士の岡澤君がX線構造解析を引き受けてくれており、研究室全体を積極的に牽引してくれています。訪問研究員の植田君との研究も進んでいます。一方、物理学科（西尾先生、佐藤さん、梶田先生）、無機教室（高橋先生）との共同研究でも成果が出つつあります。また東大物性研の森先生には磁化率測定、薬学部の佐藤先生には抗がん活性の測定でお世話になりました。こうしていろいろな先生がたにお世話になりつつ、今年も年末を迎えました。もっとも、今年の論文発表数は過去5年間で最低でした。これは長い本論文をいくつも仕上げつつあるため、来年早々には多数の成果発表が出来ると思えます。研究室の皆さんの成果を、卒論修論として図書館におさめるにとどまらず、論文として広く公開し、学術資料として残すことは、(税金から支出されている)学術研究を進める上での義務です。特に、院生は全員の名前をSciFinderに載せるべく、私も日夜頑張っています。学生さんに最後の詰め(例えば元素分析)までしっかりやってもらうのは、このためです。人によっては、化学に接するのは学生生活のごく短い期間だけなのかもしれません。こう考えれば短い間ですが、それに積極的に取り組むことによって、学術研究の姿を知り、その一翼を担うことの出来る、貴重な機会でもあります。そして、この体験を、ぜひそれぞれの将来のために役立ててほしいと思っています。

研究室外の教育活動について印象に残った出来事として、今年の4年生の学年の授業には、昨年に引き続き少し苦勞したことがあげられます。授業が成立しにくいという初の経験で、レポートの内容や提出状況も、例年に無く悪いものでした。しかし、その中で際立って意欲的な学生さんが当研究室に入ってきてくれたことは私にとって嬉しいことです。今後が期待されます。本学はこの数年、「東洋経済」誌によれば「上位校」にランクされています(巻末資料参照)。これは大変嬉しいことです。教員の側は、それに見合った研究環境・テーマを学生さんに提供し、学生さんには相応の研究実績を挙げてもらおうということが、義務であると思っています。しかし本学では、それが実際のところ少し難しい点があります。研究室運営についても、私自身が悩まない日は無いといってよいほどです。

なお、今号でも卒業生から寄稿をもらうことが出来ました。嬉しいことです。また今回からは、従来の研究紹介に代え、修論・卒論の要旨を綴じこむことにしました。研究室ではちようど要旨を作る時期を迎えますから、現メンバーにとって良い参考になると思えます。また、春に卒業した皆さんにとっては、学生時代の一頁が思い出されるかもしれません。それ以前の卒業生にとっても、研究室のテーマが、引き継がれ、さまざまな形に生成・発展していく様子を知ることは喜びでしょう。私も、今年のメンバーも、みな元気でやっています。

今後の研究室の発展と、在学生・卒業生の皆さんの活躍を祈りつつ。

2004年12月 持田